

昭和文学全集



2

石川達三

昭和36年10月30日発行

著者 石川達三

発行者 角川源義

印刷者 中内あき子

製本者 鈴木俊一

装幀者 原弘・永井一正

発行所 株式会社 かど かわ しよ てん 角川書店

東京都千代田区富士見町2
振替口座 東京 195208 番

本文用紙 三菱製紙株式会社

クロス 日本クロス工業株式会社

函張見返 特種製紙株式会社

石川達三

2

角川版
昭和文学全集

目次

人間の壁(全)

七

解説

久保田正文 五七

年譜

六一

箱絵 星月夜

ゴッホ(一八八九年)

石川達三

志育とは

用ひて

あり

達三

人間の壁（全）

放射能雨

教室の窓は全部ひらいている。木肌の白くささくれた、古い木造校舎は三むねに分れていて、広い赤土の運動場を三方からとりかこんでいる。二十幾つの教室の、一つ一つの窓から、子供たちの調子の高い声があふれてくる。一千百人の小学校児童たちが、一せいに叫び、わめき、笑い、歌っていた。去年の春からつづいた一年間の授業は、昨日でおしまい。今日は大掃除。それがすんだら通信簿をもらって帰るだけだ。

長方形の校庭には、春の雨が降っていた。放射能をふくんだ、毒の雨だ。昨日、新潟で六千カウント、おととい、名古屋で三千カウント。それが人体に蓄積されれば、数年後には人類の危機がくるだろうという。子供たちはそれを知っている。知っているが、こわくはないのだ。危険なものは、何だって面白い。三人の男の子が、わざわざ雨の中に出てきて、天に向かって口をひらき、赤い舌を出すのだった。

「おい、おい、放射能を食ったぞ。うまくねえや。つめてえ……」

雨は高い空から、光りながら、音をたてて降っていた。その

雨が、十年のうちに、この子供の骨を腐らせるかも知れないのだ。あらゆる教室の窓からあふれて来る子供たちの声は、無数の不協和音が集って、雨の音にまじって、却って一つの調和した、潮騒のような遠いひびきとなり、大人の社会では決して聞くことの出来ない、若い、おさない、清潔な音楽になるのだった。

一時間半もかかって大掃除が終ると、机をもとの位置にならべ、雑巾バケツをかたづけ、学級図書を整理し、さて、取りすました顔になってめいめいの机に腰をおろす。子供はなにかしら本能的に、演技を知っている。つい一分前まで、あれだけの大騒ぎをしていたのに、いまは急に厳肅な表情をつくり、大人のような分別くさい顔をしている。それが通信簿をもらうための演技だった。子供は純真なものだと、普通には思われているらしい。しかし子供を教えている先生の眼から見ると、なかなかそれだけのものではない。案外子供はうそつきで、悪知恵があり、競争心、嫉妬心、貪欲、偽瞞、阿諛、威嚇、大人のもっている悪徳は、ことごとくその萌芽をもっているのだ。

やがて担任の女教師が、紫色の風呂敷包みをもって教室にはいつて来る。クラス委員の男の子が濁った声で号令をかける。敬礼、着席。

机と椅子のがたがたする音が静まるのを待ちながら、女の先生は教壇の上でにこにこ笑っている。しかしその表情にはうそがあった。風呂敷包みの中には五十六枚の通信簿がはいっている。通信簿が子供にとって、どんなに苛酷なものであるかは、先生自身が知っている。その苛酷さをまぎらすために、先生はつくり笑いをしているのだった。

一分後に、子供たちは過去一年間の自分の成績を知らされるのだ。怠けたり、いたずらをしたり、喧嘩をしたりした事の総決算をつきつけられる。そして自分の能力の限界を知らされる。国語は4、算数は3、社会も3、図画工作は4。あまり良くない成績。……その子供は、これから先の五十年の生涯を予言されたような、不気味なものを感じるに違いない。一年に三度ずつ、そういう苦痛に耐えながら、生徒たちは育って行くのだった。

出席簿の順に、先生はひとりずつ生徒の名を呼んで、通信簿を手渡す。子供たちは自分の机にもどってから、二つ折りになった白い紙をひらき、紫色のゴム印の数字に、さつと眼を通す。成績の良い子は黙っている。成績のわるい生徒はさわぎ立て。自分の通信簿をひろげて、頭の上で振りまわす。それが恥かしさに対する子供の抵抗だった。算数が2だということを、わざと驚いたような声で叫びたて、げらげらと笑う。子供の心にも虚無の思いがあり、絶望がある。その絶望に負けまいとして、この子は懸命にさわいでみるのだ。さわいでいる生徒の悲しみを、先生は知っている。叱るわけにはゆかない。先生はつくり笑いをしながら、黙って見まもっているのだった。

同じ通信簿であっても、生徒の年齢によっては、その苛酷さには段階があった。五年生六年生の子供にとっては、自分の成績が数字で示され格付けされるといふことが、心の痛手であった。人格的に成長してくると、自分の成績に責任を感じてくる。この数字から逃れることが出来ないのだ。その辛さは、いわば大人になりかけている辛さだった。

一年生にはそういう辛さは無い。通信簿をもらうことも、遊

びのうちだった。先生からももらうものは何でもうれしい。通信簿でさえうれしい。一年生の受持ちの先生は(持ちあがり)で、四月からもう一年、この子供たちを教えることが、ほぼ予定されている。だから先生も気が楽だった。

須藤先生はもう四十ちかい年の女教師で、十七年のあいだ低学年ばかりを担任して来た人であった。その永い経歴が彼女の性格になっている。寛容な、母親のようなゆったりした態度。くり返しくり返し言い含めるような言葉つき。おどろきもせず腹も立てない気の長さ。顔色は疲労にくすんでいて、額にしわがあった。

雨はまだ降っている。先生は家へ帰る子供たちを見送って、下駄箱のところまで行って見る。歌っている子、騒いでいる子、怒っている子。先生の腰のまわりで、子供たちが渦を巻いていた。

「先生、あたしの傘が無いの」

「無いことはないでしょう。ちゃんと探して見た?」

「探したけど無いの」

「困ったわねえ。これはだれの傘?」

「秋元さんじゃないかしら」

「これ、秋元君の傘?」と先生はたずねる。

「違う」

「じゃ、だれのですか。……あら、秋元と書いてあるじゃないの。これ、君のではありません?」

「僕んじゃない」

「だって秋元と書いてあるのよ。君が持って来たんでしょ?」

「うん」

「そんなら君の傘じゃないの」

「僕んじゃない」

「じゃ、これはだれの傘？」

「兄ちゃんの」

「兄ちゃんのを借りて来たんでしよう」

「うん。僕の、ここんとこ、骨が折れたんだ」

須藤先生は毎日子供たちと、そういう呆けた会話をしているのだった。呆けた会話のなから、子供たちの心がむき出しになって出てくる。そういう稚ない子供の心に直接に触れることの喜びは、低学年を担任した教師だけが知っているものであった。その喜びにひかれて、彼女は十七年も勤めつづけて来たのだった。

手数のかかる五十幾人の生徒たちが、みんな出て行ってしまふまでには、十分以上もかかった。生徒の姿が全部見えなくなると、一年が終ったという、淋しいような感慨があった。しかしあと一週間たてば、あの子たちは全部二年生になって、新しい教科書と新しいノートを持って、また彼女の教室へもどってくる。その日が楽しみで、待ち遠しかった。

須藤先生は大掃除のあとの、ほこり臭い長い廊下を、職員室までもどって行った。二年まえ、三年まえに教えた生徒たちが、みな見違えるほど大きくなり、しっかりした顔つきになって、めいめいの通信簿をもって、廊下にあふれていた。

職員室のガラス戸をあけると、炭火のいぶるにおいがした。そのにおいをかぐと、何かしら、春が来たのだという気がした。右手の壁にとりつけた大きな黒板にむかって、校務主任が明日の予定を書いていた。

九時 卒業式

十一時 謝恩会、PTA合同

午後一時 職員会

一年間の反省

四月の予定について

教科書の購入について……

校務分掌について……

立ちどまって、何気なくそれを見ると、校務主任はふり向いた。

「あ、須藤先生、ちょっと校長室へ行って下さい」

その言い方はいつもの穏やかな調子だったが、眼の色が違っていた。ただの事務的な連絡だけではない、心のとまどいが現われていた。須藤先生はかすかな不安を感じながら、職員室を横ぎって、となりの校長室の扉をノックした。

扉は向う側から開いた。そして紺色のスーツを着た志野田先生が出てきた。緊張した、不安な表情をしていた。なにかあったに違いない。

入れ違いに須藤先生は校長室へはいった。小肥りの、しわの多い顔をした熊井校長は、窓に立って煙草をすいながら、校庭の雨を見ていた。

「あのお呼びでしたかしら」

校長はにっこりして、

「この分では、明日も雨かも知れないね」と言った。彼は茶色のスリッパをはいていた。いつも足の指の水虫に悩まされていく人だった。

「そうですわね。晴れば暖くなるんでしょうけど……」

「そう。……先生は、今日の午後は、何か予定がありますか」
 「ええ。……来年度のカリキュラムを、少し研究してみようかと思つて居ましたんですが、あの、(持ちあがり)させて頂けるんでしょうね」

熊井校長はいまいな態度で、すぐには返事をしなかった。鼻の奥で唸るような声をたてながら、自分の机に坐り、眼をぱちぱちさせた。それから、言いくそうにして、

「あの、午後一時から二時までのあいだに、市の教育長のところに顔を出してくれませんか」と言った。「……さっき電話でね、先生に何か話があるそうです」

「私にですか？」と須藤先生はつぶやいた。

「志野田先生と二人です。いっしょに行つてみて下さい」

小学校の教師が直接に教育委員会に呼ばれたり教育長に呼ばれるということは、減多にあることではない。学校教育のうえではほど大きな落度があった時か、ないしは人事に関することだと思わなくてはならない。須藤先生はいま、自分に大きな落度があったとは思われなかった。教育長が話があるというのは、人事問題であるに違いない。

「あの、わたくしに、どんな御用なんでしょうか」と彼女は聞いてみた。

「いや、僕は何も知りません。ただ電話で、来るように伝えてくれと言うことだけでしたからね」

校長の言い方には、なにかすっきりしないものがあつた。転勤のはなしかも知れない。しかし今までの例から見ると、転勤は直接に命令のかたちで来るか、前以て校長から相談を受けるか、どちらかであつた。校長は知っていたに違いない。それを

自分の口からは言いたくなかつたのだ。

彼女は軽く会釈しただけでその部屋を出た。ついさっき、通信簿を渡して送り出してやった子供たちと、このままで別れることになるのかしら、と思うと、辛気がした。そういう別れ方は、今までに何度となく経験して来ている。いくら永くても三年だつた。四年生になると、みんな彼女の手から離れて行く。教師と生徒との関係は、期限付きだ。……

職員室には机がたてに三列にならんでいる。窓ぎわの一行には六年と五年の担任教師が向いあつて坐り、中央の一行には四年と三年の担任者が居た。廊下にかかい列は二年と一年の担任で、大部分は女教師だつた。もう五十にかかい半白の事務職員が一番隅に机をもつて居り、その机の上には書類と帳簿と、印判を入れた四角な木箱とが置いてある。正面には校務主任の大きな古い机があつて、黄色い水仙の花を生けた花瓶がのせてあつた。この学校のなかで、職員室だけが大人の世界だつた。ここには大人の世界のぎこちなさがあり、繁雑さがある。二十幾つの教室はすべて子供の世界だ。職員室はこの学校のなかで、孤立した、気むずかしい、不調和な場所であつた。

須藤先生は校長室を出ると、六年担任の志野田先生のところへ行つてみた。三十を過ぎたばかりの、すっきりと背の高い、清潔な感じの先生だつた。

彼女は自分の机の上に紫色の風呂敷をひろげ、二枚の通信簿をひらいて、じつと考えていた。

「あら、それ、どうしたんですか」と須藤先生は言った。

相手は顔をあげた。澄んだ、淋しい表情をしていた。そして「長欠よ」と言った。「……今日も来て居ないの。どうしたらいい

「いかしら」

「でも、卒業できたの？」

「いいえ、だめ。二十九日しか来て居ないのよ。困るわねえ」

長期欠席のための落第が、彼女の組に二人あった。ほかのクラスにも二、三人は必ず居るのだ。ことに上級生に多い。

「先生、教育長のところへ行くんでしょう。私も呼ばれたのよ」と須藤先生は言った。「何の用だか、あなた御存じ？……転勤じゃないかしら。わたし心配だわ」

すると、志野田ふみ子と同じに六年生を担任してきた一条先生が、隣の席から怠惰な口調で言葉をはさんだ。

「そりゃ、須藤先生、違いますよ。転勤じゃないですなあ」

そう言いながら、彼は椅子の背にだらしなく上半身を反らせ、くわえ煙草で、うす笑いをもらしていた。彼の言葉を聞くと、

志野田ふみ子は理由のわからない反感を覚えるのだった。小肥りのつややかな頬、きれいに剃ったゆたかなあご、役者にもなれそうな整った顔と、金ぶちの眼鏡、二重まぶたの、他人を軽蔑したような眼つき、いなかの小学校の先生に、こんな美貌は必要ではないのだ。その美男子ぶりを鼻にかけたような態度が、志野田ふみ子には我慢がならない。

「転勤でなければ、何ですの？」

「竹越君にきいてごらん。彼が説明してくれますよ」

「何のことを言ってるっしょるの？」

「つまりね、あんた、組合の支部から通知が来たのを見なかったでしょう」

「見せんわ。何ですの？」

一条太郎はわざとらしく小さいあくびをした。それから煙草

の灰をはたき、ちらと女教員の顔を見て、

「まあ、僕の想像ですがね……」と言った。「正確なところは行って見れば解るでしょうが、要するに先生は、退職を勧告されるんですよ。多分ね。……だから、行くまえにちよつと竹越先生と相談した方がいいだろうと僕は思うな。分会長が知らなかったというのでは困るだらうからなあ」

二人の女教師は思わず顔を見合せた。須藤先生のしわの多い顔は、哀願するような表情になっていた。ついさっきまで彼女は、持ちあがりの二年生の子供のために、来年一年間の教育課程（カリキュラム）を今から研究しておこうと思っていたのだ。ここで不意に退職させられるとすれば、明日から私は一体、何をして生きて行けばいいのか。……彼女の眼に涙がうかんで来た。

志野田ふみ子は急いで眼を外らすと、大勢の教師たちのあいだから、教職員組合分会長の竹越先生を探した。しかし彼女はまだ疑っていた。こんなに急に退職を迫られるような理由は、自分には無いと思っていた。

彼女は教職員組合のことは、よく知らなかったし、興味もつてはいなかった。給料が上がるのは有難いけれども、そのために教室をはなれてデモ行進をやったり、県庁や市役所へ押しかけたたりするような事は、好きでなかった。それだけのひまがあるならば、その時間で自分の勉強をするのが教師の任務だと思っていた。

しかしいま突然に、退職を迫られるかも知れないという立場に立たされると、どうしていいか解らなかつた。職員室のなかには三十人ばかりの先生たちがいて、書類を作ったり雑談をし

たり煙草をすったりして居た。さっきまではみんな(同僚)であつた。いまそれが急に、赤の他人に見えた。彼女とは縁の遠い、冷たい、赤の他人のように思われた。

彼女は立ちあがり、大勢の机のあいだを縫^ぬって、三年生担任の竹越先生のところへ歩いて行つた。

竹越分会長は一年じゅう袖口^{そでぐち}のすり切れた紺色の背広服を着て、黒のネクタイをしめていた。やせて小柄な、風采^{かざり}のあがらない先生である。子供が五人あつて、長女は高校にかよつてゐる。その子供たちを養い育てるだけで、彼の生活はせい一杯だつた。

彼は職員室の黒板に向つて右手を高く伸ばし、きれいな正確な文字を書いた。

緊急職場集会

本日十二時半より約三十分。本校音楽教室において開催。なるべく全員出席願います。(それまでに昼食を終るよう都合をつけて下さい)以上。

生徒が早く歸つたので、給食はなかつた。先生たちはめいめいの弁当をひらき、いつもよりも静かに食事をしていた。その静かな態度が、退職を迫られてゐる二人の女教師に対する同情のようでもあり、かかりあいになりたくないために息を殺してゐるようでもあつた。放射能をふくんだ雨は絶え間もなく降りつづき、校庭に水たまりができていた。校庭のむこうに、遠く海が見える。灰色にけぶつて、いつもよりも海が狭く見えた。

食事が終つたところを見はからつて、竹越先生は立ちあがつて声をかけた。

「あの、皆さん。おすみになりましたら、音楽教室の方へ行って下さい。一時から私は支部の連絡会に出る予定になつて居ますから、それまでに終るようにしたいと思います」

音楽教室は第三校舎の一番はずれにある。生徒の居なくなつた廊下を歩くとき、先生たちはどことなく姿勢を崩していた。教師の姿から自分自身の姿に返つていた。すると、若い男の教師はただの青年になつてしまふ。その方が気楽な様子だつた。いままでひと気のなかつた教室はひえひえとしていた。黒板には卒業の歌が書いてある。その白墨^{びやくぼく}の色が、もう何日か経つたような、しめつた色をしていた。(仰げば尊し、わが師の恩……)あした、卒業生百何十人は、涙をながしながらこの歌をうたうのだ。その合唱を聞くたびに、年に一度ずつ、先生たちは自分の至らなさを思い知らされたような気がして、身ぶるいするのだつた。

男の先生たちが椅子の位置を変えて、会議室のかたちをととのえる。分会長が自分の坐る場所をきめる。女教師は片隅にひとかたまりになる。だれよりも遅れて一条先生が煙草のけむりをなびかせながら、肩にレインコートをかけてはいつて来た。手に灰皿を持つてゐる。そういう要領の良い男だつた。

熊井校長は来ていなかった。この学校では校長も教職員組合の組合員になつていたが、ちょうど客がきていた。客にかこつけて、気づまりな職場集会をのがれたのかもしれない。

竹越先生は組合の分会長になつてはいるが、積極的に組合の活動を組織し実行して行く(指導者)というような人柄ではなかつた。

「では今から……」と彼は言った。「お忙しい所を申訳ないで

すが、皆さんに御相談したい事が出来たので、臨時の集会をひらきます。私はどうしたらいいか、迷っていたのですが、二、三の先生から、それは職場集会でできた方がいいという御忠告がありましたので、急にこの会をひらくことにしました訳です。

それで、早速議題にはいりますが、実はつい一時間ほど前に、市の教育長から校長先生に電話がきまして、志野田先生と須藤先生とに、出頭を求められているんです。用件は、何か話があるというだけで、内容は知らされて居りませんが、退職勧告であらうということは大体察しられる訳です。

さきごろ、県教組からも、当市の支部を通じて、退職勧告は絶対に拒否するようにという指令が来て居りますが、この点、皆さんの御意見をうかがいたいんです」

二人の女教師は被告のような立場であった。分会長の質問に、だれも答える者が無い。答えない人たちの心の冷たさが、志野田先生は胸にしみた。みんな、かかりあいになりたくないのだ。組合の結束というのも、その程度のものらしかった。ある教師は椅子の背に頬杖をついて、窓の外の雨を見ている。ある教師は爪先で拍子をとりながら、黒板に書いてある卒業の歌を胸のなかで歌っている。

「いかがでしょう、皆さんの御意見は……」と竹越先生はもう一度言った。「尾張さん、どうですか」

「そうですね。支部からの指令の通りでいいんじゃないんですか」

「なるほど。……すると具体的には、どうするという事になりますか」

「拒否するんでしょう？」

「いや、その拒否の方法ですね」

「方法って言いますと？」

「つまり、組合として拒否するのか、個人個人で拒否するのか……」

「さあ、それは皆さんに聞いてみて下さい」

「あの、その前に……」と、女教師のなから発言があった。

「二人の先生がたに、この機会にやめたいというお気持があるか無いか、それを伺って置かなくてはだめだと思っんです。とにかく勧告に従ってやめた時は退職金が三割から五割も多いんですから、そういう事も問題になると思っんです」

ひそかな笑い声がきこえた。

「解りました」と竹越先生も色つやの悪い顔に微笑を見せて答えた。「それでは一つ伺いましょう。須藤先生、勧告をうけた場合におやめになる気がありますか」

須藤先生は少し青い顔をしていた。ついさっき、雨のなかに子供たちを送りだした時の、あの優しい表情はまるで消えて、別の女のように老けた顔になっていた。

「どういふ場合に、退職の勧告を受けるのか、それを教えて頂きたいんです。私はやめさせられるような理由は、ないと思っっているんですけど……」

「はあ。その、どういふ場合に勧告をうけるかということ、何か一定の基準がありましたかねえ。僕はちょっと覚えていないんですが……」竹越分会長は自信のない言い方をした。

「一定の基準はありますよ」と、一番うしろの席から返事があった、一条先生だった。

彼はわざとらしく斜の姿勢になって、レーンコートを肩に羽

織り、軽く足を組んで、くわえ煙草をしていた。まるでみんなを見下しているような態度である。彼はどんな場合にも他の教師たちの集団から一歩はなれてゐた。その離れた所から皮肉な眼でみんなを見おろしている。年は三十を出たばかりで、まだ独身の教師だった。

「その基準はでずなあ、第一に老朽教師といえますか、つまり年をとって教育能力を失ったと認定されるような先生ですよ。これはまあ、仕様がなすな。しかしそれは今度のお二人には適用されないでしょう。おそらくね。……それから、一番問題になっているのは例の共かせぎの場合ですな。これは僕なんか絶対に安全ですが、要するに共かせぎの夫婦の収入の合計がええと……四万円とか四万二千円とかでしたね、そういう先生たちはどちらか一方の人に、なるべくやめてもらいたいというんですよ。須藤先生も志野田先生も共かせぎでしょう。お二人の収入の合計がその位になるんじゃないんですか」

そこまで言って、一条太郎は小さな笑い声をたてた。それを聞くと志野田先生は黙って居られなくなった。一条先生を黙らせたいという気持もまざっていた。この一年間、二人とも六年生を担当して来たが、そのあいだじゅう一条先生は志野田ふみ子の努力やあせりを、横からひやかしたりからかったりするよ様な態度をつづけていたのだった。

「竹越先生、私はいまやめる訳にはゆかないんです」と彼女は言った。「勧告を拒否するには、どうすればよろしいんですか」

「呼ばれても出頭しなければいいんですよ」
分会長より先に一条の方がそう答えた。

「それだけでいいんですか。それだったら私は行きませんわ」

「いや、それだけでいいかどうかは解らんですなあ。白金小学校に居った新田君という、僕の知りあいの先生の場合ですが、去年の春だったかな、退職勧告が来たのに、行かなかったんですよ。そうするとね、ひと月ほど経ってから、沢谷の奥の小萱という分校へ転勤命令が出されたんです。これは僻地ですよ。山道を四里も歩いて登らなくてはいけない所なんだ。電灯なんかもちろん無い。生徒は十八人とかいふ、単級学校ですよ。」

新田君というのは気の強いやつでね。それも断ってしまったんだ。そんな僻地へ行かされる理由はないっていうんだな。そうするとまた二カ月ほど経って、夏休みの前だったか、新田教師は無能だからやめさせてはどうかという勧告が、……勧告といつても半分は命令ですね、それが校長のところへ来たんですよ。教育委員会から。……そこでもしも、校長が教師をかばって、この人は決して無能ではないという証明をしてやれば、事はすんだかも知れないんだが、校長は教育委員会のごきげんを取らなくては、自分の損になるんだからね。可哀相に新田君は無能教師という烙印をおされてね、結局やめたですよ。そういう事もありますからねえ」

「今のおはなしですと、何だか私たちに、黙ってやめた方がいっておっしゃるみたいですね」

「いや、そういう訳じゃない。僕はただ知っている事実を報告しただけですよ」

「竹越先生、私はいまやめる訳にはゆきませんわ」と彼女は言った。

「……教育長のところへは、参りません。ただ、皆さんに御迷惑をかけては悪いですから、組合がどうするという事ではなくて、私が勝手に行かなかったという事にして頂けばよろしい」

と思えます」

そこまで言うとは、彼女は息が詰ってきた。本当は、もうひとこと付け加えて言いたかった。(いま私は主人と共かせぎですけれど、近いうちに離婚するかも知れないです!)……しかしそれをみんなの前で言えるほど、彼女はぎつい女ではなかつた。

穴山^{あなやま}という若い教師が、額に垂れさがる髪を右手でかき上げながら、左手を持ちあげて、「分会長、発言していいですか」と言った。短期大学を出て、この学校へ就任してからまだ三年にしかならない、蒼白い顔をした、一本気な青年だった。

「いま志野田先生の言われたことも御もつともだとは思いますが、けれど、僕たちは日教組という組合の一員ですから、今度のよいうな事件が起ったときには、全員が結束して共同の利益を守るというのが、組合の当然の義務じゃないかと思うんです。ですから、こういう時にこの学校の分会はどうすればいいのかという事は、おのずから決まっていますんじゃないんですか。決まっているならば、皆でその通りにすればいいと思うんです」

これは分会長を困らせるような言葉だった。竹越先生は気の弱い笑いをうかべて、

「ええ、本当はそうなんです」と言った。「それがしかし、むずかしいんですよ。組合が結束して今度の退職勧告を拒否するとなると、この分会は教育委員会と正面衝突ですからね。ひいては市の教職員組合支部が黙って居られなくなり、もっと大きくなれば県の教組と市の教育委員会、県の教組と県の教育委員会とが衝突することになるかも知れないでしょう。だから、問題をなるべく大きくしないで解決するにはどうすればいいか、

それも考えて置かなくてはならんと思うんですよ」

「そうしますと、何だかこの組合というものが、何の役にも立たないような気がするんですけど……」と、穴山先生は不平そうにつぶやいた。「一体、こんどの退職勧告というのは、この学校だけに来ているんですか、他にも来ているんですか」

「ほかの学校にも来ているんだらうと思えます」

「それを調べてみたらどうですか。もしもうんと大勢の先生がたに來ているんだったら、組合の方でも腹をすえてやらなくてはならんと思うんです」

「腹をすえて何をやるんだね」

一条先生が皮肉な調子でそう言った。

「何をやるかということは、組合の執行部がきめることだと思つて、僕にはわからんですが、とにかく教師というものが、共かせぎで収入が多いという程度の理由でもって、本人に何の落度もないのに首を切られるというのは、絶対に不当だと思つて、そういう事に対して、組合が何もできないんだつたら、組合は無意味じゃないですか」

「純理論でかたがつくんだつたら、話はんたんだよ」一条太郎はわざと退屈そうな言い方をして、背伸びをした。

「ああ、そうですか。僕には何だか、よくわかりませんがね」

穴山先生はそれだけ言つて口を閉じた。先輩の皮肉な態度にこれ以上はさからいたくなかつたのだ。その機会をとらえて、分会長は事態の收拾のために発言した。

「それではどうでしょうか、今日のところはひとまず、志野田先生と須藤先生とが個人的に、退職勧告を拒否して出頭しないということにしておきまして、ほかの学校の様子とか、退職勧